

## 日本人における孤立性拡張期高血圧発症および、収縮期高血圧への移行の予測因子

Predictors of new-onset isolated diastolic hypertension and progression to systolic hypertension in Japan

迫田 隆

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 心臓血管・高血圧内科学

**【目的】** 孤立性拡張期高血圧 (IDH: 収縮期血圧 < 140mmHg かつ拡張期血圧  $\geq$  90mmHg) 発症の予測因子は、中流階級の白人を対象としたフラミンガム研究の解析により、肥満度指数 (BMI) の増加、ベースラインでの若年、男性、BMI が明らかにされている。しかし日本人における IDH や IDH から収縮期・拡張期高血圧 (SDH: 収縮期血圧  $\geq$  140mmHg かつ拡張期血圧  $\geq$  90mmHg) への移行の予測因子の報告は少ないため、調査した。

**【方法】** 2007年から2013年の間に健康診断を受診し、5年後のフォローアップが可能であった35～65歳の一般日本人口42591名のデータを分析した。初回受診時正常血圧で5年後にIDHを発症した受診者、初回受診時IDHで5年後にSDHを発症した受診者それぞれにおいて、発症に関わる因子をロジスティック回帰分析した。

**【結果】** 初回受診時点では、正常血圧29965名、IDH1169名、SDH11457名であった。正常血圧29965名のうち566名が5年後にIDHを発症した。年齢、肥満、慢性腎臓病、脂質異常、糖尿病、高尿酸血症、喫煙歴、飲酒歴を調節因子としたロジスティック回帰分析の結果、年齢 ( $p=0.0015$ )、男性 ( $p<0.001$ )、肥満 ( $p=0.0012$ ) が有意な予測因子であった。一方、IDH1169名のうち612名が5年後にSDHを発症し、関連する因子は認めなかった。

**【結論】** 日本人においても、年齢、男性、肥満がIDHの予測因子であった。また、IDHからSDHへの移行は予測困難なため、IDHに至らないよう肥満を防ぐことが大切である。